

特集 混迷を深める現代社会を理解するために……

100冊で読み解く「いま」

大澤真幸 / 社会学者

変化のうちにある定数に着眼
変化そのものをつかむ

神里達博 / 千葉大学教授

社会は科学や技術とどうつきあうか
死活的に重要な領域に飛び込んでみては

増原裕子 / LGBTコンサルタント

LGBTへの偏見構造を知り
勇気を持って声を上げ続ける

谷口真由美 / 大阪国際大学准教授

男もツライ、女もツライ
そんな世の中を変えてみたい



特集

監視社会を生きる

小笠原みどり / ジャーナリスト

不可視の監視と情報統制は始まっている
——スノーデン証言から考える共謀罪時代

伊藤智章 / 朝日新聞編集委員

大垣警察の市民監視と情報提供



9784022811080



1920030007413

ISBN978-4-02-281108-0

C0030 ¥741E

定価：800円(本体741円)

発行：朝日新聞社

発売：朝日新聞出版

朝日選書●新刊

960 板坂則子 1,836円 978-4-02-283060-5	961 ジテメ・ウイメンノト / 著 忠平美幸 / 訳 1,836円 978-4-02-283061-2	962 小泉和子 1,836円 978-4-02-283062-9	963 高田良信 / 著 小滝ひろ / 構成 1,620円 978-4-02-283063-6	964 佐藤友亮 / 著 1,620円 978-4-02-283064-3	965 ブリーモ・レーヴィ / 著 竹山博英 / 訳 1,620円 978-4-02-283065-0
江戸時代 恋愛事情 若衆の恋、町娘の恋	菌痛の文化史 古代エジプトからハリウッドまで	くらしの昭和史 昭和のくらし博物館から	高田長老の法隆寺いま昔	身体知性 医師が見つけた身体と感情の深いつながり	改訂完全版 アウンシュアインは終わらない これが人間か
いつの時代も「恋愛」は物語の主要テーマ。江戸期小説、浮世絵、春画、春本から読み解く、江戸の恋。	恐怖と嫌悪で語られる「菌治療の世界」を、エピソードたつぷりに綴った〈笑える菌痛の世界史〉。	昭和は史上、くらしがもっとも充実した時代だった。衣食住さまざまな角度から見た激動の昭和史。	「人間一生勉強や」当代一の学僧の全生涯。貴重な資料発見の経緯や古代史ブームの表裏を語り尽す。	武道家で医師の著者による、一歩先の面白い「からだ」の話。内田樹氏との対談も収録。	強制収容所から生還した著者が、極限状態にある人間の魂がいかに破壊されていくかを克明に描き出す。
947 小倉紀蔵、大西 裕 / 編 嫌韓問題の解き方 1,512円 978-4-02-283047-6	948 飛鳥むかしむかし / 編 飛鳥むかしむかし / 編 1,998円 978-4-02-283049-0	949 飛鳥むかしむかし / 編 飛鳥むかしむかし / 編 1,998円 978-4-02-283049-0	950 飛鳥むかしむかし / 編 飛鳥むかしむかし / 編 1,998円 978-4-02-283050-6	951 政策会議と討論なき国会 官邸主体体制の成立と後退する熱議 1,728円 978-4-02-283051-3	952 武則天 幕末明治新聞ことばはじめ 1,620円 978-4-02-283052-0
野中尚人 / 青木 暹	奈良文化財研究所 / 編 早川和子 / 絵	奈良文化財研究所 / 編 早川和子 / 絵	奈良文化財研究所 / 編 早川和子 / 絵	近江俊秀 / 編 1,728円 978-4-02-283053-7	953 古代日本の情報戦略
954 落語に花咲く仏教 宗教と落語は共舞する 1,512円 978-4-02-283054-4	955 ルポ 希望の人びと こぼれきた認知症の当事者発信 1,620円 978-4-02-283055-1	956 中東とイスラエルの地政学 イスラエル・アラビカリシテから読む21世紀 2,052円 978-4-02-283056-8	957 枕草子のたくらみ 著者はあはれに初められた意思 1,620円 978-4-02-283057-5	958 山本淳子 1,620円 978-4-02-283057-5	959 文化庁 / 編 1,620円 978-4-02-283058-2

朝日新聞出版 表示価格はすべて税込みです。
<http://publications.asahi.com/>

特集

100冊で読み解く「いま」

変化のうちにある定数に着眼
変化そのものをつかむ

大澤真幸 6

社会は科学や技術とどうつきあうか
死活的に重要な領域に飛び込んでみては

神里達博 12

LGBTへの偏見を生みだす構造を知り
勇気を持って一つ一つ声を上げ続ける

増原裕子 19

押しつぶされないために
「働き方」と「働かされ方」を知る

本田由紀 26

男もツライ、女もツライ
そんな世の中を変えてみたい

谷口真由美 32

読む・書く・話す・聞くをどう結ぶか
示唆を与えてくれた座右の書

牧原出 38

言論の自由とジャーナリズム
同時進行的な崩壊が進んでいる

山田健太 44

時機がかなえば、人生を変える邂逅に
危機のときに出会う「言葉」は命綱にもなる

若松英輔 50

無駄が生み出すアイデア
ヒントはあさつての方からやってくる

嶋浩一郎 56

「観察映画」を撮る僕をつくった
本との出会いを「観察」してみた

想田和弘 62

監視社会を生きる

第2特集

大垣警察署による風力発電の反対市民監視
懸念される萎縮、守れるかモノを言う自由

伊藤智章 68

事件報道が「加担」する監視社会
権力見張る側面強化を

田畑暁生 75

不可視の監視と情報統制は始まっている
——スノーデン証言から考える共謀罪時代

小笠原みどり 82

「公文書管理のあり方は」
意思形成過程に関する公文書の取り扱い
独立性の高い第三者機関を設けて監視を

三宅弘 90

〈連載〉記者講座「良い記事」の見分け方④

▼紙面審査の実例

隠れた問題点をすくい上げ、疑問を投げかける
少しずつでも事態を良くする記事を応援したい

南井徹 98

〈連載〉「政要事情」④——若手研究者の目

日本の首相にも公式別荘を？

私的・公的に様々な利点

佐藤信 106

■メディア・レポート

◆新聞 爽やかな報道合戦が連帯感を生む
協会賞に学ぶ記者の健全な在り方

猪股征一 110

◆出版 「宣伝」から「プロモーション」へ
出版流通の縮小で変わる広告手法

星野涉 112

◆ネット ネット議論の行き先はバベルの塔？
AI利用のNスベ炎上を思う

高木利弘 114

◆放送 中期計画の目標、2部門で達成
チューリップテレビが見せた現場の力

市村元 116

■海外メディア報告

「親米」排除に動くカンボジア
英字紙を廃刊、米系ラジオに圧力

木村文 119

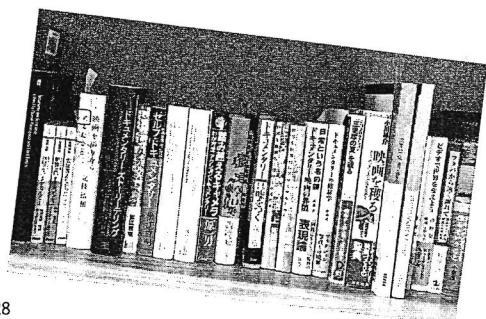
■カラグラビア 写真家の目

廃虚の街と化したモスル
ISに奪われた日常

バックナンバー 105

写真と文 鈴木雄介 126

朝日新聞全国世論調査詳報
2017年8月定例RDD調査 141



Journalism

2017年10月号 通巻329号 朝日新聞社 ISSN 1883-2628

世間知を上げるための10冊

男もツライ、女もツライ そんな世の中を変えてみたい



たにぐち・まゆみ

大阪国際大学グローバルビジネス学部准教授。1975年生まれ。2004年、大阪大学大学院国際公共政策研究科修了。専門は国際人権法、ジェンダー法。12年に「全日本おばちゃん党」をフェイスブックで立ち上げ、おばちゃん自派で「オッサン政治」をチェックしている。現在、代表代行。著書に「日本国憲法 大阪おばちゃん語訳」(文藝春秋)、「憲法って、どこにあるの?」(集英社)など。

個人的な趣味と言われればそこまでだが、幼少期の育った環境も手伝って、私はラグビーという競技が好きだ。かつて、父親が近鉄ラグビー部(現近鉄ライナーズ)の選手を引退した後に、同部コーチとなり、同じタイミングで母が同部寮母となった。近鉄ラグビー部の寮はその昔花園ラグビー場のスタンド下にあつたため、家族でラグビー場に移住したのは私が小1のときのことだった。

利他的なラグビーが育てる仲間を信じ、人を見る力

常に18歳から30歳くらいまでのマッ

拳で(落として)いかないと、あるところまでウワァーと引つ張られてしまうたら、もうなんにもできませんよ、私たちがそうだったんだから」。真剣にラグビーをした者は、人を見る目は養われると思う。チャウシエスクは国威発揚ならならいからとラグビーを嫌い、ムツソリーニは選手の非従順性を見抜いてラグビーに関心を失ったそうだ。チェ・ゲバラはラグビーに夢中になった。

私がラグビーを好きな理由は、利他的なスポーツだからだ。後ろにボールをまわして前に進むなんて、なんて不合理で不条理なのだろうと思うが、後ろにいる仲間を信じないといけない。ズルをする奴は、審判がみていなくても一緒にプレーしている者たちがみている。

かつて、おおかたのスポーツは男のものであった。いまから半世紀以上前に、男がやつても八百長だといった色眼鏡で見られていたプロレスで、エロダグロダという偏見もたたかいた。リングの上でも闘っていた女たちがいた。代表格は、1955年に女子プロレスラーとしてデビューした小畑千代だ。秋山訓子『女子プロレスラー 小畑千代』によれば、1955年といえば、朝鮮戦争によ

チヨな男たちとの共同生活は、振り返ってみるとかなりヘンテコだ。そんな「The 男社会」の中心で、ゴマメとしてかわいがられて育った私が、フェミニストになったのは偶然ではない。男社会の息苦しさを垣間見て育ち、成長とともに自分が女であることで社会的差別の対象になっていった過程で、私はフェミニストになった。誰もがしんどい社会は、誰も望んでいる訳があるまい。男もツライ、女もツライなんて世の中おかし。そんな思いから、より社会的にツラそうな女性の権利を研究することとなった。さて、2019年にはワールドカップが日本で開催されることもあって、ラグ

の特需景気に続いて、高度経済成長に突入していく時代。それに合わせるように日本の女子プロレスは始まったのだ。

また、女性の社会運動も活発になっていく。例えば、1955年6月には、第1回「日本母親大会」が開かれ、全国から2千人の母親たちが集まった。中心人物は、戦前から市川房枝らと共に婦人参政権運動で活躍した河崎なつたちであった。女だつて、自分の頭で考え、社会と関わりをもち、おかしと思うことに声を上げ、行動する。「女が闘う」女子プロレスと、こういった女性の動きが期を同じくしているのは偶然ではないだろうと秋山は記す。

韓国、沖縄、プロレス…… 虐げられたものが歴史を紡ぐ

日韓基本条約が結ばれる2年前の1963年には、「日韓親善」のために2週間ほどの日程で韓国を訪れ、韓国の女子プロレスラーと親善試合を行っている。また、何度か、戦争の傷跡を色濃く残し、米軍の統治下にあつた沖縄に、力道山よりも早く訪れ試合をしている。秋山は「誤解を恐れずにいえば、韓国、沖縄、プロ

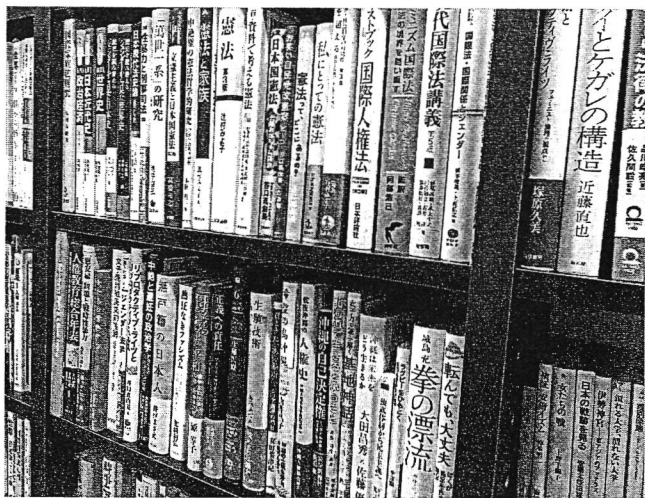
ビーが認知され、メディアでもあらゆる角度から取り上げられている。ラグビーを取材する機会のある皆さんに、ぜひとも目を通しておいてもらいたいの、藤島大「人類のためだ」。帯にはこうある、「明日の炎天下の練習が憂鬱な若者よ、君たちはなぜラグビーをするのか。それは『戦争をしないため』だ。」と。

かつて、元日本代表監督で早稲田大学教授であつた故・大西鐵之祐さんは最終講義でこんな話をした。「権力者が戦争のほうに進んでいく場合には、われわれは断固として、命をかけてもそのソーシャル・フォーセス(※闘争の倫理を知る者による社会の基礎集団)を使って(選

レスは日本からみれば、虐げられたものはみだしたものが紡いできた歴史なのだ。女子プロレスは、「女性」という点でさらに差別が一枚加わる。だからこそ小畑は誇りをもって目線を高くし、闘い続けてきた。」と書く。共通するのは、日本(本土)との間に不幸な歴史があり、時に差別の対象になってきた場所ということ。

小畑にとつて、プロレスの魅力は、「プロレスそのものの魅力」と「女だからやりたかった」という側面があつたと語る。自分の体一つで勝負ができるシンプルさ、プロレスのような世間からも偏見を持たれがちな職業を生業とすることに對する自負と誇り、反発、そして愛情が見える。「マイナーだったからこそチャンスがあつた。女でもこれくらいできるということを見せたかった。男のプロレスがあるんなら人気があるのか。『たかが女の』とみんな思っているでしょう。よし、たかが女というのならやつてやろう、という想いがあつた」と回想する小畑は今年81歳、まだ引退した気はさらさらない。

小畑らが復帰前に訪れた沖縄は、日本(本土)から行くのにパスポートが必要だった。本土復帰から今年で45年。先



が適用されると」

いま、沖繩をめぐる状況をみてみると、とても日本国憲法が沖繩でも最高法規であるとは信じがたい。そしてこの数年、「沖繩ヘイト」が酷くなっていると感じる。東京出身で、大学卒業後に沖繩タイムズ記者となった阿部岳による「ルポ 沖繩 国家の暴力 現場記者が見た「高江165日」の真実」は、阿部自身が「よそ者」であることに意味がある。私はずつと大阪にいますが、阿部と同年で同じ時代を生きてきた。だからこそ、沖繩の被害を知らずにのうのうと生きていた衝撃を、沖繩に対する責任を改めて考えさせられる。

沖繩の2紙は潰さないといかないといった売れっ子作家、基地反対の抵抗運動をする人々を「土人」と発言した大阪府警の警察官、反対運動の人々を「過激派」とデマとレッテル貼りをしたテレビ番組、なんという酷いことをと憤る日々だが、沖繩に向けたこういう状況を生み出しているのは、私の隣で普通に生活している人々の無関心に他

ならない。

再構築できるか日米関係 少女たちに見る沖繩の現実

沖繩と米軍基地の問題は切っても切り離せず、米軍基地と地位協定などの問題に關しての日本政府の態度については、一体どこの国の政府かと思うくらい、アメリカの立場を擁護する。阿部も書いていたが、昨年の「オスプレイ墜落事故」の際には、日本の警察も手出しできず、沖繩の土地であるのに、見るだけしかできない状況を垣間見た。猿田佐世「自発的対米従属 知られざる「ワシントン拡声器」」では、「アメリカがこう言っている」というときの「アメリカ」とはどこを指すのかといえば、この発信源の典型的なものはアメリカの知日派、アメリカの中の少人数の集まりにすぎないという。しかも、その限られた人たちに、情報と資金、そして発言の機会を広く与え、その声を日本で拡散しているのは日本政府であり、日本のメディアだと言われている。この知日派の典型が、リチャード・アーミテージ氏。トランプ氏の当選後、日本の報道番組で「大変残念なこと、恥ず

だつて、琉球新報社の記者からこんな話をきいた。「本土では、日本国憲法について押し付けられたという論もあります。沖繩では日本国憲法を勝ち取ったという見解も多いんです。日本国憲法が沖繩にも適用される。これで、沖繩にも日本と同じように平和や人権、そして主権

べき事態。」と言つてのけた。知日派はこぞつて、トランプ氏反対を表明し、トランプ政権の重要なポストには誰も就けない事態となった。いまこそ、対米従属から脱却し、日米同盟について深く考察し、未來的な思考でアジア近隣諸国との関係を再構築する必要があると猿田は説く。

その沖繩では、少女たちが別の側面から過酷な状況にさらされている。『裸足で逃げる 沖繩の夜の少女たち』の著者、上間陽子は沖繩で生まれ、育ち、15歳で地元を離れ、また地元に戻った大学教授だ。沖繩には、在留米軍の基地の大半がある。そのことは沖繩に住むすべての人々に、思想信条は関係なく影響がある。「彼女たちは、家族や恋人や男たちから暴力を受けて、生きのびるためにその場所から逃げようとしています」「米軍基地のフェンスによつて分断された無数の街は、彼女たちが見た街です。どこからも助けはやってこない。彼女たちは裸足でそこから逃げるのです。」とある。

上間が真摯に向かい合った少女たちは、常に暴力と隣り合わせで生きており、「性」を売ること生き延びている。調査に出てくるシングルマザーは全員、自分のパートナーであり子どもの父親であ

る男性と関係を解消したあと、慰謝料も養育費も一銭ももらえず、単身で子どもを育てることを強いられている。少女たちが暴力や貧困の中にいて、多くの困難を引き受けるしかなかったことを上間がよしとしているわけではない。それは、「少ない資源で選ぶ道がそこしかない」という事実であり、長いあいだ、女性や沖繩の問題が放置されている、日本の現実」を示している。問われているのは沖繩の少女たちではなく、私たち大人全員なのだということを思い知らされる。

「活躍させてよ」 女性たちの声が聞こえる

貧困にさらされている少女／女性たちは、沖繩をはじめとして全国にたくさん存在している。女性が輝き活躍する社会と政権はよく使うが、その貧困の実態を見聞きするにつけ、どこに輝いて活躍できる社会があるのか、疑問しかわいてこない。雨宮処凛「女子と貧困 乗り越え、助け合うために」は、輝かせてよ、活躍させてよ、そんな社会がどこにあるってどういうの？という声が聞こえてきそう。生活保護世帯でも学びたい女性、

原発事故で自主避難し困難に直面している女性、キャバ嬢たちが労働組合をつくって連帯したり、夫のギャンブル・借金・自己破産を経て離婚し2人の子どもを育てる女性が出てきたり。登場する女性たちの困難は、たまたま隣に座った女性が抱えていることかもしれない。

10年の時限立法とはいえ、2016年からは女性活躍推進法も施行され、働く女性の活躍推進のための法的枠組みも整備された。政府は、あれやこれやと少子化対策を講じているが、本当に必要としている人に届いていないことが多い。雨宮がインタビューした子育て中のシングルマザーである女性正社員は、「育児ハラスメント」を受け、降格させられ、正社員としてもらえる手取りは月14万円という。降格人事も、給料も納得がいかない彼女は、個人加盟の労働組合プレカリートユニオンに相談し、最低生活費に足らない部分は生活保護を受けられることも教えてもらった。団体交渉も行い、結果的に会社を提訴した。きちんと伴走してもらえない団体につながれば良いが、そうでない女性が大半だ。政府の政策は、本来はこういう女性に届くべきものだ。しかし、政治の争点が安法案の行方

世間知を上げるための10冊

谷口真由美 選

藤島 大

『人類のためだ。ラグビーエッセー選集』

(鉄筆)

秋山訓子

『女子プロレスラー 小畑千代

闘う女の戦後史』

(岩波書店)

阿部 岳

『ルポ 沖縄 国家の暴力

現場記者が見た「高江165日」の真実』

(朝日新聞出版)

猿田佐世

『自発的対米従属

知られざる「ワシントン拡声器」』

(角川新書)

上間陽子

『裸足で逃げる

沖縄の夜の街の少女たち』

(太田出版)

雨宮処凛

『女子と貧困

乗り越え、助け合うために』

(かもかわ出版)

西山千恵子・柘植あづみ

『文科省／高校「妊活」教材の嘘』

(論創社)

杉田 聡

『AV神話

アダルトビデオをまねてはいけない』

(大月書店)

浅倉むつ子

『雇用差別禁止法制の展望』

(有斐閣)

森川幸一・森 肇志・

岩月直樹・藤澤 巖・北村朋史

『国際法で世界がわかる

ニュースを読み解く32講』

(岩波書店)

だしている男女の社会的／経済的な格差をはかる指標として使われるジェンダーギャップ指数(GGI)ランキングは、世界144か国中111位、これまでの最下位という悲惨なものとなった。この国は女性が輝いたり、活躍したりなんて本気でできるのかと思えてくる。浅倉むつ子「雇用差別禁止法制の展望」は、このジェンダー格差を、雇用分野から膨大な研究をもとに刊行された。

政府は、「働き方改革」を推進しているが、そもそも根強い性別役割分業があり、家事・育児責任は圧倒的に女性に集中している。まず男性の働き方が改革されな

ければ、女性労働者の活躍は無理だ。なぜなら、男性の家事・育児時間が長くなるほどその配偶者の離職率は低下しているというデータがあるからだ。また、政府は2019年度から、同一労働同一賃金制度を導入することを決めた(中小企業は同一労働同一賃金制度の適用に1年間の猶予あり)が、果たしてどんな効果があるのか。そもそもは、「同一価値労働同一賃金原則」と呼ばれるべきものがあるだろうが、この機会にちゃんと学ぶためには浅倉の本は外せない一冊である。

さて最後に、巷では、私は憲法が専門のように思われている節があるが、専門

⑧

性と生殖は個人とカップルの権利である、1994年のカイロ国際人口開発会議以降、グローバル社会の常識となった。しかし、今回のこの教材事件は、日本は妊娠・出産の知識レベルが国際的に特に低いという強引な説に基づき、政治と、またそれと結びついた「専門家団体」が「医学的・科学的に正しい知識」の教

育の必要性を主張し、国家による生殖への干渉が教育を通して常態化されようとしていることを示唆している。全国の高校生に、改ざんしたデータ等を示して、若い年齢での妊娠・出産を奨励し圧力をかけようとしていたことに、別の「専門家」たちがぎつちりと反証をする過程が描かれている。そもそも若い年齢の妊娠・出産を奨励し、それを高校で啓発教材として使用するのなら、高校生が妊娠・出産して退学になるなどというニュースが流れてくること自体がおかしい。

セックスの低年齢化が進んでいると言われて久しいが、しつかりとした教材のないなかで、教材代わりにAV(アダルトビデオ)をまねるんです、と大学の教え子(男子)に言われたことがある。また別の教え子(女子)は、彼氏とのセックスでは、いつも必ず最後に顔面射精をされることを相談してきたことがある。たまたま彼氏も面識があったので、彼女が嫌がっていることを伝えたと、鳩が豆鉄砲を食ったような顔をして「ぼく、性体験がほとんどなくて、AVみたら最後に顔面射精しているのが多くて、それで女性が気持ちよさそうにしているからそ

うじゃないといけないと思っていました。

彼女は嫌がっているんですか？ 嫌われたらどうしよう」と涙目になった。

そんなとき、学生たちにすすめるのが杉田聡「AV神話 アダルトビデオをまねてはいけない」だ。AVは、セックスとは似て非なる性暴力(レイプ、監禁、痴漢行為、セクシュアルハラスメント等)まで、あたかもセックスのバリエーションであるかのように提示されている。日本でも、レイプの事件が絶えず、今年に入っても、詩織さん(仮名)が有名ジャーナリストにレイプをされたと告発したが、被害者たる彼女に対してのバッシングはひどいものがある。なぜ被害者がバッシングされないといけないのかという問いへの一つの答えは、レイプものと呼ばれるAVの存在があると思えてならない。メディアでの女性の扱いも、それを企画したり演出したりする側に、AVの影響が大き

日本のジェンダーギャップ過去最低を記録

話を少子化対策と女性活躍推進に戻すが、女性活躍推進法が施行された2016年、世界経済フォーラムが毎年

はそもそも国際人権法であり、大学では国際法を教えている。

日本のメディアでは、領土問題や安全保障問題などが生じたとき、国際政治学者のコメントは取っているが、国際法学者にきいている例はほとんどない。森川幸一・森肇志・岩月直樹・藤澤巖・北村朋史「国際法で世界がわかる ニュースを読み解く32講」を読むと、ニュースの背景にある国際法の重要性が、大変よくわかる。メディアがあまりコメントを取りにいかない国際法学者に、国際社会のできごとをきいてもらいたい。個人的な